第１回 宇部市民オーケストラ後援会 賛助会員コンサート

植木 章と宇部オケの仲間たち

平成 24 年４月 28 日（土） 14：00 開演
於：宇部ヒストリア １階イベントホール

モーツアルト クラリネット五重奏曲 イ長調 K.581

第１楽章 アレグロ イ長調 4/4 拍子 ソナタ形式
第２楽章 ラルゲット ニ長調 4/3 拍子 ソナタ形式
第３楽章 メヌエット イ長調 4/3 拍子
第４楽章 アレグロ・コン・ヴァリアチオーニ イ長調
2/2 拍子 変奏曲形式

クラリネット 植木 章（元新日本フィルハーモニー 首席奏者）
ヴァイオリン 安永 恵（宇部市民オーケストラ コンサートミストレス）
清水治子（同上 セカンドヴァイオリン トップ奏者）
ヴィオラ 濱野妙子（同上 ヴィオラ トップ奏者）
チェロ 栗林宏明（同上 チェロ トップ奏者）

プログラム

いつか夢で
ニューシネマ パラダイス
花
故郷
荒城の月

～ 休 憩 ～

モーツァルト クラリネット五重奏

主催
宇部市民オーケストラ後援会

モーツアルト クラリネット五重奏曲 イ長調 K.581

モーツアルトは音楽芸術のために曲を書くことなどしなかった。殆どはお金のためであった。この曲もいつもお金を貸してくれる友人シュタードラーのために書いた。そのため、「シュタードラー五重奏曲」とも呼ばれている。動機はなんであれ、出来上がった作品はえも言われぬ高貴な香りのする室内楽曲の中でも屈指の名曲となった。

シュタードラーはクラリネットの名手でモーツアルトはことあるごとに彼の演奏に霊感を受けたという。クラリネットは 18 世紀に登場した新しい楽器でモーツアルトがその真価に気付いたのはシュタードラーの演奏を聴いた 1784 年頃と言われている。その人声に近い音色は、モーツアルトにとって、特に、オペラにおける愛の表現に欠かせぬ楽器となった。原曲は現在のクラリネットよりさらに低い音が出るバセットクラリネットという楽器と弦 4 本のための五重奏曲であったが、この楽器は現存しないので、A 管クラリネットで（一部低音の演奏が不可能なところは１オクターブ上げて）演奏される。

復元されたバセットクラリネット（シュタドラー考案、ロッツ作成）

曲は、１789 年、彼の死２年前の作品である。同じクラリネットの協奏曲 K.622 とともに「白鳥の歌」にふさわしく全体に気高くも透明な悲しみを湛えている。曲の冒頭、弦がしっとりと美しく歌い出し、続いてクラリネットが広い音域を試し弾きするように分散和音で加わる。その後も互いに和声の陰影をつける紡ぎ出しが終始緊密に行われ「春の雲ひとつない青空（アーノルド）」を思わせるような澄んだ曲想が続く。第３楽章初めのトリオではクラリネットが完全に休む。これは長丁場を支える奏者への配慮であろう、と平野昭氏は書いている。（海老澤敏監修、モーツアルト事典、ｐ534、東京書籍）

演奏時間約３６分。

植木 章氏プロフィ-ル：

宇部市在住。桐朋学園大学にて北瓜利世、室内楽を故斎藤秀雄各氏に師事。卒業後、1970 年～71 年、西独デトモルトにてミナエルスに師事。
1971 年～75 年、ウィーン在住。その間、クラリネットをルドルフ・イエッテル教授[1)]、室内楽をエールベルガー[2)]・ホレチェック[3)]各氏に師事。ウィーン国立アカデミー（現音楽大学）を卒業後、
1975 年～2007 年までの 32 年間にわたり、新日本フィルハーモニー交響楽団クラリネット奏者を務めた。
現在も新日本フィルの要請で重要な演目には参加し、宇部市民オーケストラのトレーナーも務める。

注１）ルドルフ・イエッテル教授
1903 年ウィーン生まれ。ウィーン音顎アカデミーでポラチェックに学ぶ。（ウラッハとは同門）。その後、ウィーン・フィル首席奏者、ウィーン音大教授を務め、シュミードルを始めオッテンザマー、トイブル、ブラントホーファー等々、彼の育てた奏者はウィーン・フィルに限らず数知れず。しかし、録音は同時代のウラッハがあれだけ多くの録音を遺した割には少ない。1981 年ウィーン没。

…ダイソー100 円ショップのＣＤコーナーに、モーツアルトのクラリネット協奏曲が売られているそうである。評判の高かったウラッハ／カラヤン／ウィーンフィル盤も売られているとのことであるが、宇部の店頭には見当たらない。

注２）カール・エールベルガー（ファゴット）
1912 年、オーストリア生れ。1936 年（24 才）ウィーン音楽アカデミーを卒業と同時にウィーンフィルハーモニーの首席奏者、1938 年（26 才）ウィーン音楽アカデミーの教授就任。以降ウィーンの伝統を継ぎ世界各国からの多くの後進を育てる。

注３）フランツ・ホレチェック（ピアノ）
1911 年、チェコスロヴァキア生れ。プラハ音楽院でセルに師事。1948 年、ウィーンに移住。1955 年ウィーン音楽アカデミーの教授就任。オーストリア十字勲章受章。

植木章氏の師匠、ルドルフ・イエッテル教授のエピソード

（www.geocities.jp/oehler_spieler/diary2008.htm より）

「十亀正司の、世界の名盤・珍盤」と題する講演が新宿ドルチェ楽器であった。そこで聞いたイエッテル教授の話が面白過ぎるので紹介したい。十亀さんは、往年のウィーンフィル、クラリネット首席奏者イエッテル教授のタンギングの速さについて、東京交響楽団のクラリネット奏者、小林利彰先生から聞いたという次のようなエピソードを披露してくれた。

小林先生がウィーン国立音大に留学していた頃、イエッテルのタンギングが凄く速かったという噂を聞いた。そこで先生は、イエッテルが自身の作品をサクソフォンで吹いているドーナツ盤レコードを手に入れ、当時ウィーンで学んでいた日本人仲間を集めて試聴会を開いた。曲はその名も「スタッカーティッシモ」と「ワイルドタング」。聴き終わって皆が「やっぱスゲーなぁ」と感心していた時、イエッテルのジャケット写真を見ていた一人が叫んだ。「あれ？変だぞ！先生はアルトサックスを持ってるのに、今のはテナーの音だったよね？」。原因を調べると、レコードプレーヤがドーナツ盤用の４５回転ではなく、ＬＰ用の３３回転にセットされていたことが判明。恐る恐るもう一度４５回転で再生してみると、音はめでたく本来のアルトに戻ったのだが、とても人間業とは思えぬタンギングの速さ（しかもシングル！）に全員言葉を失ったのだとか。

実は僕もこの演奏が入ったＣＤを持っている。１０年前、ホルツのウィーンツアーで、イエッテルに学んだウィーン・トン・キュンストラー管弦楽団のクルト・シュミット教授から戴いたように記憶している。サックスという楽器にちょっとした苦手意識を持っているので棚にしまったままだったが、今回改めて聴いてみると確かに驚異的に速い。手許のメトロノームを使ってざっと計算すると、１回のタンギングが０.０９秒！１秒間に１１回、四分音符１７０で４回の割りだ。しかも瞬間的にではなく、多い時は連続２４回も機関銃のように発射（音）しているのだ。ましてやクラよりリードが大きいサックス。舌の先が２つか３つに割れていたのでは？と疑いたくなる。

ではテクニックだけで音楽はダメだったかというと、さにあらず。シュミット先生が書いているライナーノーツによれば、かつてトスカニーニがウィーンフィルを振りに来て「アルルの女」をやった時、イエッテルが例のアルトサックスのソロを吹いた。それを聴いたマエストロ、眼鏡を外してこう言ったそうだ。「私がアメリカに渡って以来、サクソフォンという楽器には不愉快な記憶しかなかった。だが、今日、まさに、サクソフォンは人の声に最も近い最高に美しい楽器だということが分かったよ」。（後略）